

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

名もなきアフリカの地で

2003 (平成15) 年7月9日鑑賞
〈ヘラルド試写室〉

Data

監督・脚本：カロリーヌ・リンク
原作：シュテファニー・ツヴァイク
出演：ユリアーネ・ケーラー／メラ
ーブ・ニニッセ／レア・クル
カ／カロリーネ・エケルツ

👁️👁️ みどころ

ナチスによるユダヤ人迫害を見通して、母国ドイツを逃れてアフリカのケニアで生活する夫婦。その娘レギーナは、そんな困難な時代にあってもケニアの大地の中であって、たくましく育っていった。ベストセラーとなった自叙伝小説を映画化し、第75回アカデミー賞最優秀国語映画賞を受賞した作品。画面の美しさとスケールの大きさ、そしてみずみずしいレギーナの成長ぶりには感動するが、夫婦の気持ちの描き方には、もうひと工夫欲しかった……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

〈原作はドイツのベストセラー〉

この映画の原作は、女性作家シュテファニー・ツヴァイクが自らの少女時代の体験を描き、1995年にベストセラーになった自叙伝小説の『名もなきアフリカの地で』。この映画の主人公である少女レギーナ（幼い頃をレア・クルカ、10代をカロリーナ・エケルツ）はドイツに住むユダヤ人。これが原作者自身だ。祖父はホテルを経営し、父ヴァルター（メラブ・ニニッセ）は弁護士。母イエッテル（ユリアーネ・ケーラー）はやさしくて美しい。レギーナは母国ドイツにおいて何不自由ない幼い時代を過ごしていた。

〈ナチスによるユダヤ人迫害〉

しかし、時代は1930年代。ドイツではナチスが台頭してきており、ユダヤ人の迫害と戦争の開始は避けられない状況となっていた。そんな中、既に先を予見して母国ドイツの地を離れてアフリカのケニアに移住して農場を営んでいたヴァルターは、1938年4月、妻のイエッテルと娘のレギーナをケニアに呼び寄せた。今ならまだ必要最小限の荷物

を持っての出国が可能だと判断したのだ。それが今のヴァルターに出来る精一杯の行動であった。

ナチスによるユダヤ人の迫害を描いた映画は、『シンドラーのリスト』、『ライフ・イズ・ビューティフル』、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』等数多くあり、いずれも涙なしでは観られない名作ばかりだ。しかしこの映画は、そんな直接のユダヤ人迫害の姿を描くものではなく、迫害を逃れるため遠いアフリカの地に移り住んで暮らすユダヤ人夫婦とその娘の成長の姿を感動的に描いた異色作だ。

<舞台はアフリカのケニア>

ヴァルターが農場を営むのは、ケニアのロンガイという地。首都ナイロビから200km以上北西にある荒涼とした土地だ。1939年に第2次世界大戦が始まると同時に、ケニアのドイツ人はすべて敵国人としてイギリス軍に身柄を拘束されたが、その収容所はナイロビだ。そして、何とか収容所を出た後の新たな農場はオル・ジョロ・オロクの地。これもナイロビから約200km北西の地だが、ここは緑豊かな土地だった。

このようにこの映画では、全編を通じてアフリカの大地が描かれている。もっともパンフレットによると2000年夏の大干ばつなど、その撮影の苦労は並大抵のものではなかったようだ。

こんなケニアの大地の中で母国ドイツでのユダヤ人迫害のニュースや両親の葛藤をよそに、レギーナは美しく、賢く、スクスクと育ち、そしてアフリカの子供達との交流の中、豊かなこんなレギーナは美しく賢くスクスクと育ち、そしてアフリカの子供たちとの交流の中、豊かな感受性を育てていった。こんなレギーナの友人は、レギーナを「小さなメンサブ（奥さん）」と呼ぶケニア人の料理人のオウア（シデーデ・オンユエロ）。

<アカデミー賞受賞>

この映画は2002年第75回アカデミー賞最優秀外国語映画賞に輝いた。それも私が秘かに期待していた中国映画の大作『HERO（英雄）』等の4作品をおしのけての受賞だ。なるほどアフリカの自然や大地とレギーナの成長の姿がみずみずしく描かれた名作であることはまちがいないが、アメリカハリウッドにもこういう純朴な映画を受け入れる姿勢があることに多少驚くとともに安心した。

<私には納得できない(?) 夫婦関係>

この映画にケチをつける気はないが、私には、この映画におけるヴァルターとイエツテルの夫婦仲は何となくへん…?私にはどうも納得できない。第1に、家族や友人に恵まれて母国ドイツで生活していたイエツテルが、突然の荒涼たるロンガイの地での貧しく厳しい現実の生活に我慢ができず、ヴァルターとたびたび衝突する姿が描かれる。せっかく愛

する妻子をケニアに呼び寄せてもイエッテルは夫婦生活を拒むため、ヴァルターはイライラしていることがありありとわかる。だからこれによって夫婦間のミゾが次第に広がっていくこともよくわかる。しかし問題はそのミゾがどう広がるのか、あるいはどう収束するのかだが、その夫婦間の気持ちの整理の仕方がもう1つよくわからない。

第2に、第2次世界大戦の開始によってナイロビの収容所に収容されたイエッテルは、ヴァルターに新しい仕事を世話してもらったが、これは彼女に好意(?)を寄せる1人の英国兵の力によるものだ。果たしてその代償は何だったのか…?レギーナもイエッテルがこの英国兵とキスを交わすのを見てしまったし、ヴァルターも英国兵の協力によるものとわかっているのだから、夫婦仲の破綻は決定的(?)・・・と思えるのだが・・・。

第3に、ヴァルターよりも更に早く、母国ドイツに見切りをつけてケニアに入り、今やケニアでの生活を心から愛しているユダヤ人のジュスキント(マティアス・ハービッヒ)は何よりのヴァルターやイエッテルの友人だったが、なんとイエッテルはこのジュスキントと怪しげな仲に…?そしてヴァルターもこの微妙なイエッテルの気持ちの動きを勘づいた。そこまでいったら・・・。

以上のような問題の中、この夫婦はよく怒鳴り合いのケンカをしている。さらにレギーナの教育をめぐる考え方やドイツ敗戦後の身の処し方等についても夫婦間の対立はかなり深刻だ。しかし、なかなかこの夫婦仲は崩れない。そればかりか、後半になるとやけにラブシーンやベッドシーンが出てくる。そして、イエッテルの妊娠。映画はレギーナの弟の誕生を告げて終わることになる。これは原作を忠実にたどった結果だろうと思うが、そんなつまらない目でこの感動作を見てはいけないのかなと思いつつ、私としてはどうもこの微妙な夫婦関係には納得がいかないのだが・・・。

2003(平成15)年7月10日記